

Les Amants Criminels

ヘンゼルとグレーテルはまだ森の中...

# クリミナル

『ホームドラマ』『海をみる』のフランソワ・オゾン監督最新作  
主演=ナターシャ・レニエ(『天使が見た夢』)/ジェレミー・レニエ(『イゴールの約束』)

1999年ヴェネチア国際映画祭正式出品作品  
1999年/フランス映画/カラー/1時間35分 配給=ユーロスペース

# ラヴァーズ

こわくて、きれい

"we were inspired by this Francois Ozon movie"  
pierre ♥ gilles



# クリミナル・ラヴァーズ Les Amants Criminels

1999年ヴェネチア国際映画祭正式出品作品

監督=フランソワ・オゾン

主演=ナターシャ・レニエ/ジェレミー・レニエ/ミキ・マノイロヴィッチ

1999年/フランス映画/カラー/ウィスタサイズ(1:1.85)/1時間35分

配給=ユーロスペース

## 17歳の殺意と 寓話の世界

◆17歳の殺意は現実だ。それはなにも日本においてだけでなく、先進国のもつ負のエネルギーとなりつつある。クールな土壌に育つ、ひんやりとした殺意と、そこへ向かう快樂的な欲望のエネルギー。

◆フランソワ・オゾン監督も、フランスの新聞やテレビに取り上げられない日はないほどに繰り返される、10代が起こす事件からインスピレーションを受けたと言う。ただしこの『クリミナル・ラヴァーズ』が際立っているのは、たんなる社会派ドラマでもなければ、『俺たちに明日はない』『ゲッタウェイ』といった恋人たちの逃走劇とも異なり、そこに童話の要素を織り込んだ点だ。映画は当初、学校という平凡な舞台に始まり、主人公たちが殺人を犯し逃避行を試みるあたりから徐々に非現実的な様相を帯びてくる。彼らが森に踏み込んでからは、外界から完全に切断され、物語は一層シュールな寓話の世界と化していく。



## フランソワ・オゾンという タブー

◆30歳で長篇デビュー作『ホームドラマ』を撮り、フランス映画界に衝撃を与えたフランソワ・オゾン監督による長篇第2作目にあたる本作での衝撃度は、前作以上に高い。簡潔な構図と鮮やかな色彩感、軽快な演出、毒を含んだユーモア、そしてゲイ感覚。今回はさらに研ぎ澄まされた、乾いた空気感が満ちた仕上がりと

なった。

◆彼は今回もタブーを恐れず、性の不透明な領域に分け入っていく。リュックとアリスのセクシヤリティは共にあまいだ。アリスを愛する(愛していると信じている)リュックは、じつは自身でも気付かぬホモセクシヤリティを内包し、それが森の男との出会いによって顕在化する。彼にとってその荒々しい体験は自らの性に目覚める、子供から大人へと移行するイニシエーションだ。

◆一方アリスは成長することを拒否し、幻想の世界に引きこもる。その“不思議の国”では快樂はあくまでイマジネーションの産物であり、それがリアルなものに成り変わった途端、まるで魔法が解けるかのように魅力を失ってしまうのだ。彼女が肉体的に惹かれている同級生のサイドを死に追いやる理由もそこにある。生身の彼と関係を持つことは彼女にとって、大切なオブセッションを打ち砕く破壊行為でしかない。

## ヘンゼルとグレーテルの闇

◆この作品の童話に関するレファレンスの中で即座に思いつくものと言えば、グリム童話に出てくる「ヘンゼルとグレーテル」だろう。一家の貧しさから森に置き去りにされたヘンゼルとグレーテルは、自らの機転で無事に我が家にとどり着く。だが両親から執拗に遺棄をくり返され、三度目について道を見失ったとき、森の中にお菓子の家を発見する。喜びもつかの間、そこは魔女の住処であり、ヘンゼルは檻に閉じ込められグレーテルは下働きにこきつかわれる。あべく食べられそうになったグレーテルは魔女を竈に突き落とし、ヘンゼルを救って、ふたりで魔女の宝石を奪って家路につくという物語。

◆映画の中ではリュックとアリス(この名前も言うまでもなく童話的引用を含んでいる)は森に逃げ込み、そこに住む謎の男に出会い監禁される。その後リュックの策略でふたりが脱出を計る点も同じ。ただしグリム童話が最初はヘンゼルがイニシアチブを握り、後半になってそれまで頼

りなかったグレーテルが気丈さを見せて行くのに引き換え、映画ではその関係が逆転している。リュックの欲望を掻き立て殺人行為へと促し、彼を操っていたアリスは森に入った途端、主導権を失い、リュックに頼るようになっていく。ここでは森は男性性の象徴であり、聖域だ。森の男はホモセクシャルであり、アリスを監禁するかわらリュックを犯す。

◆ただしオゾンはそこにいっさいの分析的バックグラウンドを与えることなく、登場人物を欲望の原野へ解き放つてみせる。その奥にあるのは作家自身の素直で切迫した感情だ。彼の視点はずねに主人公たちと共にあり、対象を突き離すことができない。おそらくこの点が、『クリミナル・ラヴァーズ』が暗く屈折したフェアリー・テール、犯罪映画、倒錯した欲望を描く恋愛映画、といった幾多の要素を内包しつつもジャンル映画の枠組みに納まりきれない理由であり、イノセントで硬質な輝きを放っている所以だろう。

## キャスト

◆主演のアリスを演じたのは、『天使が見た夢』で98年カンヌ国際映画祭主演女優賞を受賞したナターシャ・レニエ。その存在感と危さが同居した持ち味が今回も十分に発揮された。そしてリュックを演じたのは『イゴールの約束』で清冽な映画デビューを果たしたジェレミー・レニエ。また森の男を『ハバハ、出張中!』『アンダーグラウンド』『黒猫、白猫』などエミール・クストリツァの作品や『アルテミア』でおなじみのミキ・マノイロヴィッチが演じ、難しい役を見事にこなしている。

## ものがたり

◆高校生のカップル、アリスとリュック。自らの屈折した性を遊ぶアリスは、まだ幼さの残るリュックを操って、同級生のサイドをゲーム感覚で惨殺する。やがて、死体を埋めに入った森で迷うふたりをみつめる第三者の目…。この存在がさらなる悲劇へとふたりを導いていくのだった…。

フランソワ・オゾン待望の **超** 新作!!  
11月25日(土)~12月6日(水) ロードショー上映決定!!

11:05/1:00/2:55/4:50/6:45

特別前売り鑑賞券1400円にて、好評発売中!!(当日一般1700円の処)

●前売券は劇場窓口及び、チケットぴあ、ローソンチケット、梅田周辺プレイガイドにてお買い求め下さい。



ホワイトティ梅田泉の広場M-10右とがる南へ5分

扇町ミュージアムスクエア

☎06・6361・0088 www.oms.gr.jp